なぜ英語が話せないの

〈21〉

聴覚機器設備が急務

求められる入試の改善

このシリーズでは、これまで日本人が中、高校、大学を通じて英語を勉強しながら、外国人と簡単な会話も交わせない一つの背景として「英語がしゃべれない英語教師」の問題を取り上げてきた。入試や授業時間の不足……と、教師を取りまく環境は確かに厳しい。しかし「中、高校教師の八割は厳密に言えば英語が話せない」（福田昇八・熊本大学教授）現状を脱していない。熊本県の「教員集中訓練」（略称・TTC）や福岡県の「断続研修」などを通し、先生たちの学習意欲は盛り上がりをみせているものの、事態打開への道〝具〟化する教書もかなり是正できよう。

今回から英語教師の質の向上と同じく重要な「入試問題」をテーマに考えよう。わが国の英語教育の改善を妨げる〝最大のガン〟は、入試にあるといっても過言でない。早い話が大学入試にかなりの比重でヒアリング・テストを出せば、高校入試にも波及し「現在の「読み」「書き」「文法」中心の教育準備は、大きく転換せざるを得ないからである。英語が実用面からはずれ、単なる入試、入社試験の〝道具〟に化している。

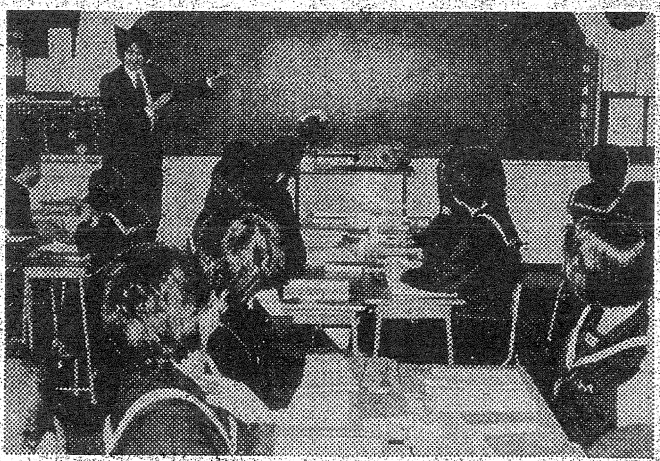
入試に少なくとも三〇％の配点でヒアリングを出すことが必要」と指摘している。それも、記憶を試すような発音問題でなく、実際の音を通じた問題にする。そうすれば、受験生は今のような教育・指導では得点できないから、教師自身も話す英語に自信を持たざるを得なくなる。

音によるヒアリング試験を実施しようとの意見は毎年、英語教師らの間で高まるものの、結局は「現状のままの移行はムリ」で片付けられる。

入試にヒアリングを取り入れるとき、最も重要な点は受験生全員が同じ条件で受験できるか否かである。例えば、受験場の前の座席に比べ、後方の座席が聞こえが悪くないか。また、中学校や高校間でヒアリング設備（CL装置など）に差があり、不公平にならないかなど、多くの問題が解決されねばならない。

しかし、長崎、大分、佐賀県省派遣の英語指導主事スティーブ・ロングさん（二六＝米国コネチカット州出身＝は語るのである。

「世界で最も発達した日本で、大して予算も必要としない設備で、いつまでも問題を放置しているのはおかしいですね」と。文部



中・高校の英語聴覚装置の整備が急務と語るロングさんの授業風景

下などの公立高校入試では既に早い県は二十数年前からマイクを使ってヒアリングを導入している。「カセット、テープレコーダーといった視聴覚機器が世